



信達の歴史シリーズ

山と川的生活史

第12回 松川と祓川 はらいがわ

守谷 早苗 (もりや さなえ)

福島市史編纂室



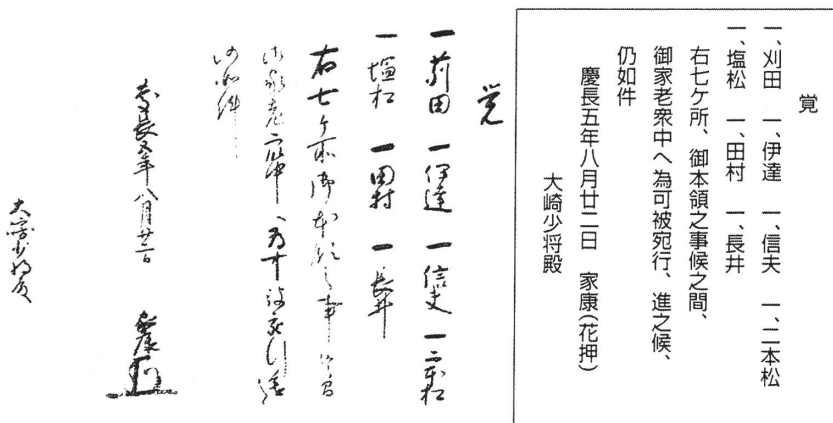
松川の合戦

慶長5年(1600)9月30日、伊達政宗は関ヶ原の戦い(9月15日)が東軍の勝利に終わったとの知らせを受け、ただちに旧領信達奪回のため、兵を福島に向けた。8月に家康から約束された「百万石の御墨付」(図I)を実力によって確実にするための出兵であった。

信達に出陣した政宗は、信夫山の黒沼神社辺に陣を構え、川を挟んで福島城と対峙した。当時、松川は信夫山の南側を流れていたため、この戦い

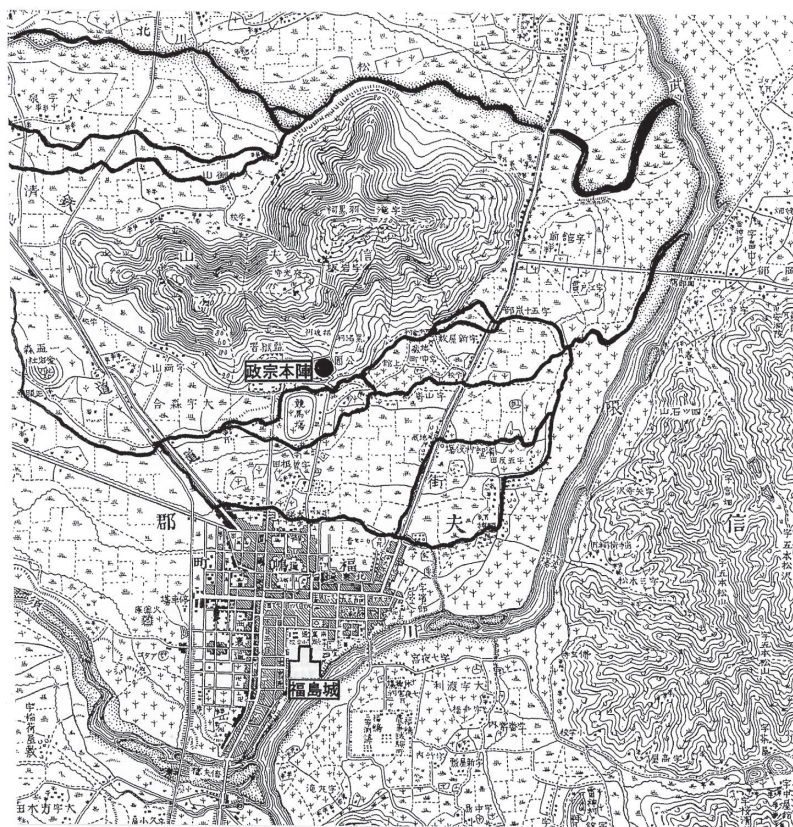
を「松川の合戦」という。関ヶ原の戦いの直後に行われたこの戦いは、戦勝者側の政宗が圧倒的に有利なはずであったが、梁川城将須田大炊が阿武隈川を渡って政宗の背後を突き、政宗は勝利を得ることが出来ずに逃げ帰る結果となった。

関ヶ原の戦い・松川の合戦の戦後処理として、上杉を30万石に削減し、政宗を、刈田郡のみの加増により100万石ではなく、62万5千石に抑えることができ、奥羽の憂いを無くした点で、家康にとって大きな意義のある戦いとなった。



図I 徳川家康判物(百万石の御墨付)(『仙台市史』より)

関ヶ原の勝利後と与えることを約束した7か所の石高は計49万5800石。当時の政宗の所領約58万石と併せると100万石を超えることになる。 ※塩松は旧安達郡岩代町付近、四本松とも書く。大崎少将は伊達政宗



図Ⅱ 明治中期の松川と祓川（旧松川）流路及び松川の合戦時の政宗本陣・福島城位置

松川の南流を示すもの

では、本当に松川は信夫山の南側を流れていたのでしょうか。その根拠とされるのは、『信達一統志』（志田正徳著、信夫郡全8巻は天保12年（1841）成稿）の御山村杉妻大仏堂の項の次の記述である。

「堂前の山下に溝瀆あり、祓川と云。如来御手洗水なり。仏世の中の穢を洗給ふなるよし、慶長年中は今の松川信夫山の南を流れしと云。今の祓川是なり。東国太平記に松川合戦とあるは山の南を流通せし時なり。関ヶ原記に伊達政宗卿と上杉家の臣岡佐内と太刀撃せし所は又本庄の臣小島左近が討死せし所、此辺に近かるべし。」

祓川の起点は

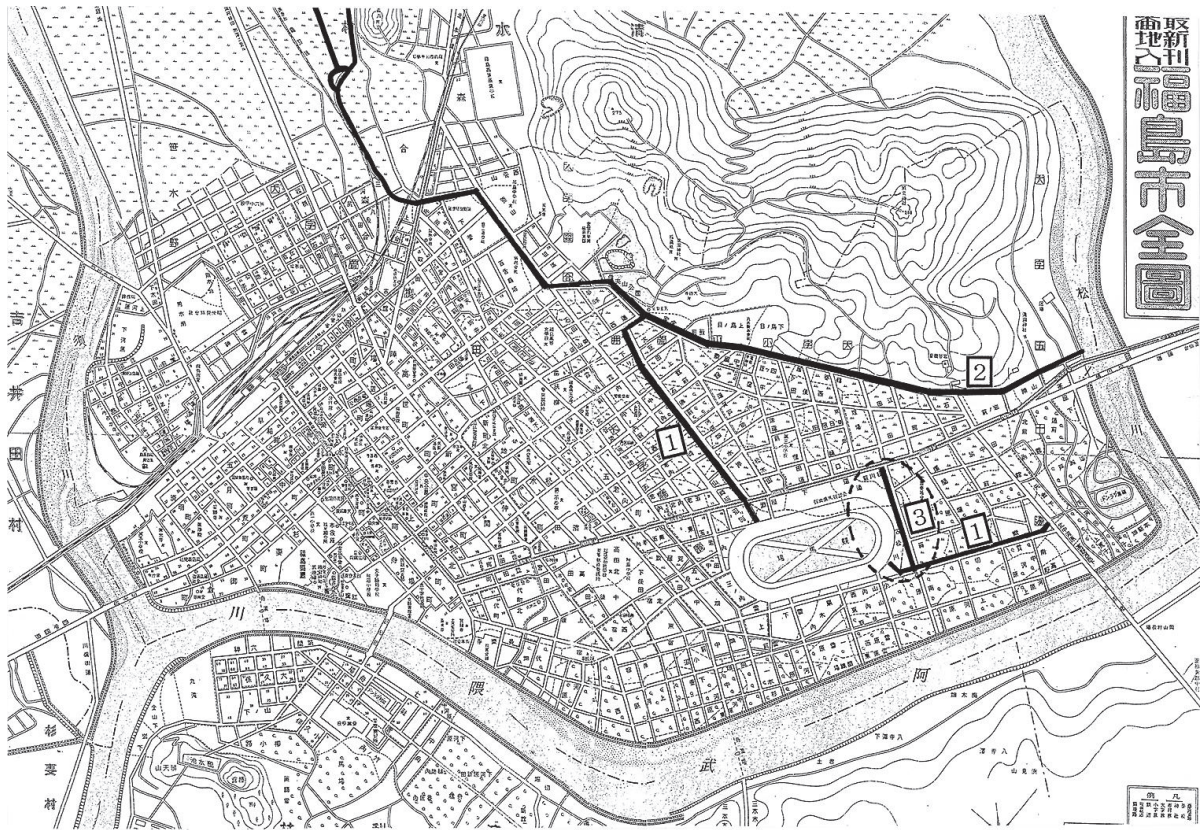
『信達二郡村誌』（明治8年県は各町村に村誌を提出させ、同13年「信夫郡誌」「伊達郡誌」がまとまり、その後同33年から『信達二郡村誌』として印刷刊行）の小山荒井村の項に「祓川 笹木野村に於いて松川を堰引して源とす。西隣森合・曾

根田両村の間より西部石田に入り、東北に蛇行し、中部を過ぎ東部鶴巻より折れて東南流し、一等路を絶て東流し五十辺村に入る。この川慶長年間まで松川と称す。明暦・万治（1655～61）の頃、洪水有りて二派に分かる。以来今の信夫山の北の川を松川と称し、此の川を祓川と称すと云ひ伝ふ」とある。

松川が信夫山の北側に流路を変え、旧松川が祓川となったのは明暦・万治の頃とあるが、一説には、寛永14年（1637）7月に阿武隈川が大氾濫する大風雨があり、その時に流路が変わったともいう。

当時の松川の流路は

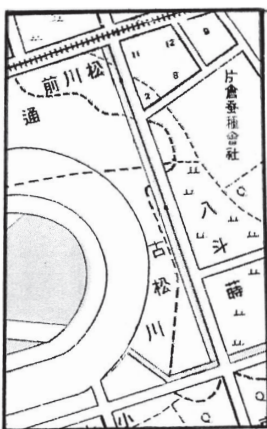
図Ⅱは明治24年（1891）測量製版の2万分の1地形図（第二師団参謀部）に描かれた松川と祓川及び政宗本陣と福島城を加筆したものである。明治時代の中頃で、松川は信夫山の北側で三筋の川が一本化されており、一盃森の脇を通過してきた祓川は逆に森合付近で三筋に分かれ、また現八島町



図Ⅲ 昭和11年祓川流路「最新刊番地入福島市全図」(昭和11年刊)

付近で合流して阿武隈川に注いでいる。松川の合戦が行われた、この300年近く昔は、堤防も築かれず、もっと千々に乱れていたと思われる。政宗の本陣と福島城の間には、雨が降ると流路を変える松川が流れていたと思われる。

図Ⅲは、昭和11年の「福島市全図」である。祓川は旧祓川橋のところで二手に分かれている。①が改修前の流路で（地図上では繋がっていないが、



図Ⅳ 字古松川と字松川前 (図Ⅲの③拡大図)

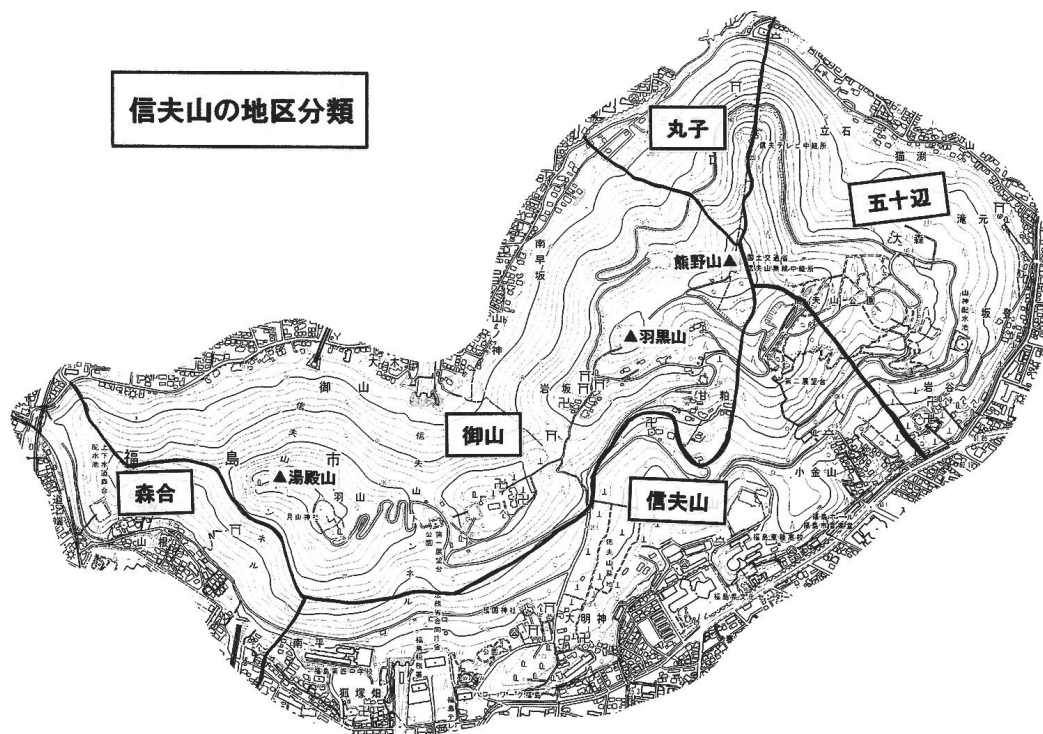
実際には競馬場の中を流れていた)、図Ⅳは③の拡大図である。これを見ると、旧腰浜村と旧五十辺村の接するところの、旧腰浜村側（現桜木町、内厩舎のところ）に「古松川」、旧五十辺村側に「松川前」という小字があったことがわかる。この

ことも、祓川が旧松川だったことを示す歴史遺産である。

昭和初期の昭和恐慌時、東北地方は大凶作に見舞われ、娘を身売りせざるを得ない状況のなか、失業対策事業として、阿武隈川護岸工事や市営グラウンド建設（信夫ヶ丘陸上競技場と野球場）と並んで、祓川改修工事が行われ（工期：昭和7年～同13年、総工費：14万円余、延べ人員：54,433人）阿武隈川に注いでいた祓川を松川に注ぐように改修した。②の流路である。

筆者は昭和30年代に松浪町に住んでいたが、路面電車の最寄りの停留所は「祓川」だった。当時、祓川は信夫山の南側の春日寮前を流れており、なぜ、停留所の名前が「祓川」なのかはずっと不思議であったが、もともとは、ここを祓川が流れていたからなのであった。ちなみにこの停留所は上り・下りの電車が交換する停留所でもあった。なお、昭和37年に日赤病院が舟場町から入江町に移転してきてからは、「日赤前」と名称を変えた。

図Ⅴは、信夫山の現行政区画を示す図である。



図V 信夫山の地区分類

丸子は、松川の北に位置する大字（江戸時代の村、現県立福島商業高校付近）であるが、川を越え、信夫山の上迄張り出していることに驚く。一般に向瀬上や向鎌田など川により村が分断されたのは、川の流路変更によるものであるが、松川が信夫山の上を流れていたことはありえず、信夫山に丸子分が張り出していることも、松川がかつて信夫山の南側を流れていたことの証左である。

現在の祓川は

さて、現在の祓川はどうなっているのだろうか、福島市河川課に問い合わせしてみたところ、想定外の回答があった。

起点：福島市森合字西中川2の25地先

終点：福島市御山町4の43地先

この回答に思わず「えっ！ 祓川はその先、一盃森よりも先にはずっと続いていますよね？ 川が流れていますよね？」と聞いたところ、「その先は下水道となっています。」との答え。

すぐに下水道建設課に尋ねたところ次のような回答があった。

祓川は、河川としては、森合字西中川2の25地

先（福島機関区付近、ヨークタウン野田線路向かい）から御山町4の43地先まで、その上流部と下流部は下水道で、特に下流部は、平成3年から10年まで「信夫山雨水幹線及び祓川下水道水みどり景観モデル事業」により暗渠工事をし、学法福島高校グラウンド側の御山橋（護国神社入り口に架かる橋）からは道路の下を流れる下水道となっている。

今、信夫山下の祓川の上を循環水流がせせらぎとなって流れ、傍らの遊歩道の、電線を埋設した街灯はガス灯のようにぼんやりと闇を照らし、小林清親の描く光線画のような情景を醸し出している。

これはこれで、筆者の好きな景観ではあるが、一方で、政宗が福島城と対峙したとき、その間を流れていた松川が、今や2キロメートル足らずの河川となり、ほとんどがその姿を見ることができなくなったことは一抹の寂しさを感じる。

時間が流れ、景観が変わっていくことはいたしかたないが、歴史の足跡、文化遺産をきちんと残していくことが、環境を変えていく主体の責任であろう。